

ヨーロッパにおけるリベラル・アーツの現代的展開

——イギリスを中心に——

鈴木 俊之

〈要旨〉

本稿はヨーロッパにおけるリベラル・アーツの現代的展開について、その背景とイギリスの大学におけるプログラムの実態について明らかにすることを目的としている。ヨーロッパの高等教育においてリベラル・アーツ教育が再導入された背景には、大衆化の進行とそれへの対応、ボローニャ・プロセスの進展などにより、従来の専門化された学士課程をよりフレキシブルにすることなどがあった。イギリスのリベラル・アーツ・プログラムの特徴は、各大学が教育的ビジョンを正当化、明確化するようになっており、それぞれの大学がリベラル・アーツの概念を哲学的、構造的に異なる解釈をしている点、強固なコアを中心に構造化されたカリキュラムを持っている点であり、現在の変化する環境の中で生きる学生をターゲットにしていると考え、学際的で包括的なアプローチそのものは時代や社会に求められていると考えられる。

キーワード：高等教育、リベラル・アーツ、イギリス、ヨーロッパ

はじめに

イギリス¹⁾の教育制度では、幅広く学習する前期中等教育段階、3～5科目程度に絞って学習する後期中等教育段階を経て、大学では一つの科目を学習する、言い換えれば専門教育が行われるのが主流である。一方アメリカの大学では幅広く学ぶリベラル・エデュケーション²⁾が主流であるが、American Academy of Arts & Sciences (2013) は *The Heart of the Matter* で次のように記している (p.18)。

中国やヨーロッパの国々ではアメリカ・モデルである幅広い教育を—イノベーションを促進する刺激として、社会的一体性の源として—複製しようとして試みているまさにそのとき、我々は焦点を絞り、そして教育とは何であったのか、何であり続けるべきなのかに関する我々の感覚を放棄している。

実際、イギリスではキングス・カレッジ・ロンドンやユニバーシティ・カレッジ・ロンド

ンなどの有力校においてリベラル・アーツ・プログラムが開設されるなど、大学教育の様相が変化しつつある。またこうしたリベラル・アーツ・プログラムを導入する動きはイギリスに限るのではなく、大陸ヨーロッパにおいても1990年代後半以降に見られるというのは注目に値するだろう。

そこで本稿は、ヨーロッパにおけるリベラル・アーツの現代的展開について、その背景とイギリスの大学でのプログラムの実態について明らかにすることを目的とする。

1. ヨーロッパにおけるリベラル・アーツの現代的展開

1990年代以降のヨーロッパ高等教育改革の中心には、ヨーロッパ内外の大学の流動性を促進し、大学同士の競争を通して高等教育の質を維持・向上させること、学生や市民の意識の覚醒を通して大学全体の活性化を図ること、総体として高等教育の透明性を高め、ヨーロッパの大学の魅力を回復すること（木戸、2005年、p.77）があるが、ボローニャ・プロセスにせよ、リベラル・アーツ教育の復活にせよ、大衆化した高等教育とそれに付随して生じたさまざまな問題および経済のグローバル化（とそれに付随する人材養成）への対応として捉えることが出来る。

以下本章ではヨーロッパ高等教育に大きな影響を与えているボローニャ・プロセスについて概観し、その後 van der Wende (2011a) の論に依拠しつつ、ヨーロッパにおけるリベラル・アーツの衰退と再出現について見ていく。

(1) ヨーロッパ高等教育とボローニャ・プロセス

周知のように、ボローニャ宣言およびそれに続くボローニャ・プロセスによって、ヨーロッパ各国による、ヨーロッパ高等教育圏（European Higher Education Area）を創出する努力は、ヨーロッパ高等教育のさまざまな分野に影響を与えている。そのボローニャ宣言は1999年にヨーロッパ29カ国から集まった教育関係大臣によって署名された宣言であり、その骨子は2010年までにヨーロッパ高等教育圏を構築することをめざしたものであった。ボローニャ・プロセスはそれを現実化するための「定期的に開催する担当大臣会議によって行程化された、多様な参画者からなる、一連にして重層的な組織的行為」（館、2010年、pp.161-162）である。

ボローニャ宣言およびボローニャ・プロセスでめざされたヨーロッパ高等教育圏の構築だが、具体的には次の6点を達成することにあつた（European Ministers of Education, 1999；木戸、2005年、pp.78-80）。

1. 容易に理解でき、比較可能な学位システムの採用
2. 2サイクル（学部・大学院）の大学構造の採用
3. 単位互換制度の導入

4. 学生および教職員の移動の促進
5. ヨーロッパ協同での質保証制度の促進
6. 高等教育におけるヨーロッパ次元の促進

1999年のボローニャ宣言採択以降、2年に一度高等教育担当大臣が集まる会議が開催されており、その都度これまでの進捗状況と今後の優先事項などを含むコミュニケがまとめられている。2009年にルーヴェン（Leuven/Louvain-La Neuve）で開催された会議では、これまでの進展を評価しながらもまだ達成されていないこともあるとして、2010年での目的達成をさらに10年、すなわち2020年までの延長が決められた（European Ministers Responsible for Higher Education, 2009）。翌2010年に開催された会議では、ブダペスト・ウィーン宣言で公式にヨーロッパ高等教育圏が作られたことを確認している（European Ministers Responsible for Higher Education, 2010）。

こうして今年で15年を迎えたボローニャ・プロセスだが、2サイクル（現在は3サイクル）の大学構造の採用や質保証制度の整備、単位互換制度（European Credit Transfer System: ECTS）の実施など、多くの分野で進展を示している。本稿のテーマであるリベラル・アーツのヨーロッパにおける再興の観点からは、学位構造のことについて少し見ておきたい。

日本やアメリカなどでは学士課程や修士課程のように課程が制度化されているのはごく当たり前のことであるが、ヨーロッパ、例えばドイツやイタリアなどではボローニャ・プロセス以前は制度化されていたわけではなかった。例えばドイツでは大学の卒業に当たるのはディプローム試験やマギステール試験などの国家試験に合格することが大学卒業を意味しており、いわゆる単位も存在しておらず、何単位取得したから卒業、ということではなかった（木戸、2005年、pp.82-84；2008年、pp.12-14）³⁾。したがってボローニャ・プロセスに参加している国々でこれまで2（3）サイクルの大学構造や単位制度を採用していなかった場合は、その対応を急いで行う必要があった。

こうした動きがリベラル・アーツの再導入とどのように関係があるのだろうか。実はボローニャ・プロセス自体、大学教育の内容について実質的に言及しているわけではない。実際、その狙いは、市民の域内での移動性を高めることとエンプロイアビリティを促進することであり（European Ministers of Education, 1999）、その手段として、（それぞれの国家の教育制度を一致させるのではなく）国家をつなげるツールを供給すること（European University Association, 2010, p.2）、すなわち上記の6つの目標を達成することであった。その内容を見れば分かるように学習プログラム、教育内容についての目標は入っていない。もちろんチューニング・プロジェクト⁴⁾のように、ボローニャ・プロセスに対応するため、大学・専門分野から「学習プログラムの（再）設計・開発・実践・評価する方法を示す」ことは行われているが、これは各専門分野の話であり、学際的で複数の専門を対象とするリベラル・アーツは、それ自体としてはその対象とはなり得ない。実際

にはこうした教育内容の面からではなく、学部・大学院の2 (3) サイクル化の促進により、これまで曖昧であった学士課程をそれ自体1つの教育段階として捉えるようになり、そこでの新しい教育—リベラル・アーツなど—を促進する要素としてボローニャ・プロセスは機能したのであった (van der Wende, 2011a, p.244)。

それではなぜリベラル・アーツがヨーロッパ高等教育に取り入れられるようになったのか、その理由について以下見ていこう。

(2) ヨーロッパにおけるリベラル・アーツの衰退と再出現

リベラル・アーツの源流がヨーロッパにあることは周知のことであるが、現在リベラル・アーツ教育が高等教育レベルで盛んに行われているのは言うまでもなく西欧ではアメリカである。その理由としてロスブラットは以下の3点を挙げている (杉谷、2002年)⁵⁾。

1. ヨーロッパに比べてアメリカでは高校の質が低いため、カレッジが教養教育を引き受けざるをえなかった。
2. アメリカが世界初の民主主義を追求した国であり、その民主主義社会の担い手たる市民を育成するうえで教養教育が必要とされた。
3. ヨーロッパでは各国の歴史や文化に裏打ちされた固有の教養教育が成立したのにひきかえ、多種多様な文化を背景とした移民から構成されるアメリカでは、いかにアメリカ人としてのアイデンティティを確立させるかが重要な課題となった。

裏を返せば、ヨーロッパでは高校 (後期中等教育) で、固有の教養教育が成立したから、ということになるが、より詳しく見てみると、ヨーロッパでリベラル・アーツ教育が大学で行われなくなったのかは、19世紀以降の大学の発展とかかわってくる。いわゆるドイツ・モデルの大学が19世紀に主流となり、大学が研究機関として発展するようになり、世界中にこのモデルが広がった。ヨーロッパだけでなくアメリカもドイツ・モデルの影響を受けたわけだが、ヨーロッパの場合は学部 (学士課程) と大学院の分化が不十分であったのに対し、アメリカでは学部ではなく大学院に研究の機能が置かれた。また専門職養成についても、ヨーロッパでは学部で養成するケースが主流だが、アメリカでは、プロフェッショナル・スクールのような大学院で養成することが主流となった。その結果ヨーロッパの大学では学部レベルで専門的な知識および専門職養成が行われ、したがって早くから専門分化が行われるようになり、リベラル・アーツ教育が中等教育段階にて行われるようになったのに対し、アメリカでは学部と大学院でリベラル・アーツと、研究・専門職養成が分化することとなり、上記の3つの理由も合わせて、学士課程でのリベラル・アーツが残ったといえる (van der Wende, 2011a, pp.235-236)。

20世紀後半になり、高等教育の大衆化がアメリカ (50年代) でもヨーロッパ (70年代) でも生じた。大衆化は後述するように、ヨーロッパにおけるリベラル・アーツ教育の復活

の背景であるが、大衆化初期の対応方法がアメリカとヨーロッパの差異を保持するように作用していく。アメリカの場合、カリフォルニア・マスター・プランに代表されるように大学の分化を伴っていたのに対し、ヨーロッパの場合、バイナリー・システムを採用していることもあり、大学と非大学高等教育機関がそれぞれ引き受けた (van der Wende, 2011a, pp.236-237)。アメリカでは大学が分化したことにより研究大学だけでなくいろいろな大学が学生を受け入れたが、ヨーロッパの場合、研究大学が受け入れるか、あるいはポリテクニクのような非大学高等教育機関が受け入れることになり、大学自体の分化にはつながることがなく、専門分化された知識を教えることが続いたといえる。

またアメリカでは私立セクターがあるのに対して、ヨーロッパの高等教育はほぼ国立であるため、その運営費は税金である。つまりアメリカでは私立大学が、独自にリベラル・エデュケーションにコミットすることが可能であるのに対し、ヨーロッパではそれが起こらなかった。特に公共善としての大学という観念が強く、そのため平等主義的な大学政策、例えば無償あるいは安価な授業料での入学がヨーロッパ高等教育の核であると認識されている (van der Wende, 2011a, p.237)。しかしながらそうした平等主義や政府による大学の運営は、大衆化を迎えても、均一性（ほとんどの大学で単一の専門分野のプログラムを提供し、伝統的な教授法を用いて教える）や過度な規制（国家レベルで決定されたコースや教員の雇用ルールなどによってカリキュラム改革や学際性が阻まれる傾向がある）につながり、ボトルネックとなっていると批判されたのであった (European Commission, 2005, pp.3-4)。

それではヨーロッパでなぜリベラル・アーツ教育が復活しつつあるのか。それに対して van der Wende (2011a, b) は次の2点を上げている。すなわち、大衆化を迎えたヨーロッパ高等教育において、1. 学士課程での早すぎる専門分化および専門化の不都合な点を克服するために、幅広くフレキシブルなプログラムを発展させる必要性、2. 卓越性に焦点を当てた、より選別的な高等教育機関（部門）を設立する必要性、である。

1についてだが、1997年のデアリング・レポートや European Commission (2005) にあるように、政府や政策担当者などから、知識基盤社会において重要であるジェネリック・スキルやエンプロイアビリティを念頭に置いた人材養成の重要性が主張されていた。そのため従来のような1つの専門分野に絞った学士課程プログラムだけではなく、より広く、学際的なプログラムが要求されたのであった。2についてだが、例外はあるものの、全体としてみればヨーロッパの高等教育は平等であり、大学間の格差があまりないと言って良い。それは平等主義の1つの利点ではあるが、上述したような均一性であったり過度な規制を生むことにもつながった。その結果「アメリカの大学システムは（中略）『トップはエリート、基盤は民主的』だが、ヨーロッパはどちらでもないようにみえる」(Winckler, 2006, p.5) という状態となっており、それを打破するものとして卓越した高等教育機関や学部を作ることが求められるようになった (van der Wende, 2011a, p.243)。そして幅広く学際的なリベラル・アーツがその役割を果たすこととなったのである⁶⁾。

2. イギリス高等教育におけるリベラル・アーツ

それではヨーロッパ高等教育に生じているリベラル・アーツ教育の復興はイギリスではどのようなになっているのだろうか。

先述したようにこれまで一つの専門を深く掘り下げて学習するのがイギリスの大学の特徴であったが、2000年以降、リベラル・アーツ・プログラムを開設している大学が増えている。例えば UNISTATS⁷⁾ のサイトで Liberal Arts や Arts & Sciences でコースを検索すると以下の11大学がヒットする；University of Birmingham、University of Bristol、University of East Anglia、University of Essex、University of Exeter、University of Kent、King's College London、University College London、St Mary's University College Belfast、University of Surrey、University of Winchester (2014/08/25現在)。これらの大学には、世間的な評価が高い大学や歴史の古い大学から1992年以降に大学に昇格した大学まで含まれており、いろいろなレベルでリベラル・アーツ・プログラムが展開されていることが伺える。

以下ではその嚆矢ともいえる St Mary's University College Belfast、世界的にも評価の高い高等教育機関である University College London および King's College London のプログラムを中心に、その内容や構造などについて見ていく。

(1) イギリス高等教育におけるリベラル・アーツの現状

(a) St. Mary's University College Belfast⁸⁾

セント・メアリーズ・ユニバーシティ・カレッジ (以下セント・メアリーズ) は、ベルファストにあるクイーンズ大学ベルファスト (Queen's University Belfast) のユニバーシティ・カレッジである。源流であるカレッジは1900年に開設され、現在の形になったのは1985年であるが、開校以来北アイルランドの教育において重要な役割を果たしてきた。教員養成がメインであったが、近年リベラル・アーツの学位プログラム (BA (Liberal Arts)) を提供するようになってきている。学生数 (12-13年) は学部生が865人、大学院生が235人の計1100人 (パートタイム含む) と小規模なカレッジである (Higher Education Statistics Agency, 2014)。

セント・メアリーズはイギリスにおけるリベラル・アーツ学位のパイオニア的存在であり、2000年に開始している。その背景には、デアリング報告 (1997年) とカレッジが99年に新たにクイーンズ大学ベルファストのユニバーシティ・カレッジの地位を得たことがあげられる (Attwood, 2010)。後者については、それまでは教員養成カレッジとして教育学の学士や資格を出していたが、このことをきっかけに学位を多様化することが可能になったからであった (Attwood, 2010)。

前者のデアリング報告に関してだが、周知の通り、21世紀を迎えるにあたって高等教育の発展が社会の繁栄にとって不可欠だとの認識から、今後20年間にわたる大学政策の方向

性を吟味し勧告したものである。その第9章で高等教育の教育内容について扱っているが、高等教育機関は教育内容の広さと深さのバランスを取るよう勧告している。これはイギリスの大学入試形態と学部での教育が比較的狭いため（大学入試であるAレベルは3教科程度であり、学部は一つの専門科目を履修する）、そうしたスペシャリスト的な人材も必要ではあることを認めつつ、産業界はジェネラリストも必要としており、高等教育はそうした産業界の要望に応えるべきであるという議論を反映している（Dearing Report, Chapter 9）。

以上のような内外の変化に後押しされ、また以前よりリベラル・アーツはセント・メアリーズが取るべき道であると多くの教員が考えていたということもあり、リベラル・アーツ・プログラムを開講することになったのである（Attwood, 2010; Tahir, 2010）。

それでは学位プログラムについてみてみよう。BA（Liberal Arts）は3年間のコースであり、全人的成長を促進し、肯定的価値や誠実さ、社会的ニーズに対する責任感を発展させるようにするために設計されている。アカデミックな学習とスキルの獲得を統合しつつ、分野横断的なアプローチを通して、以下の事を発展させることを狙いとしている。

- ・明日の世界で生活し仕事をするための知的枠組み
- ・文化的概念そしてビジネス環境としてのヨーロッパを理解すること
- ・選択された科目の主要領域における知識と理解
- ・さまざまなコミュニケーションと実践的、知的、職業的スキル

リベラル・アーツ・プログラムは3つの領域から構成されている（表1）。すなわち人間開発研究（human development studies）、国際研究（international studies）、主題研究（subject studies）であり、人間開発研究と国際研究が核をなし、必修科目となっている。一年間に学生は6モジュールを履修する必要がある、1年次は人間開発研究、国際研究ともに1.5モジュール、主題研究は3モジュール、2年次は国際研究が2モジュール、人間開発研究が1モジュール、主題研究は3モジュール、3年次は人間開発が2モジュール、主題研究は2モジュール、残りの2モジュールは人間開発、国際、主題の各領域から2モジュール選択することになっている。また3つの領域とは別にセント・メアリーズのリベラル・アーツ・プログラムの柱が「職業に関係する学習」である。これはインターンシップを含むプログラムで、1年次にはさまざまな組織への訪問、2年次には6週間、3年次には二ヶ月にわたって企業などの組織で学習することになっている。

表1 セント・メアリーズ・ユニバーシティ・カレッジのプログラム

1年次 (基礎)	国際研究(1.5)		人間開発研究(1.5)		主題研究&職業スキル(1)	主題研究(2)
2年次 (発展)	国際研究(1)	国際研究(1)	人間開発研究(1)	主題研究&エンプロイアビリティ(1)	主題研究(2)	
3年次 (統合)	国際研究(1)	人間開発研究(1)	人間開発研究(2)		主題研究(2)	
	4モジュールから2つ選択					
	主題研究(1)	国際研究(1)				

出典：St. Mary's University College サイトより筆者作成 注：かっこ内の数字はモジュール数を表す。

人間開発研究は、社会的・政治的・経済的発展における人間の探究をテーマとしており、1年次は6つのユニットからなるモジュールを受講することになっている。内容は哲学的、政治的、経済的アプローチを用いての社会と職場における個人の研究となっている。2年次はグローバル・ジャスティスと呼ばれるモジュール（4ユニット）が、3年次には必修の「リベラル・アーツ：職業に関係する学習」という企業などの組織の研究やスキルを发展させるモジュールと、選択で「アイデンティティと現代社会」という科目が用意されている。

国際研究は、現代ヨーロッパ社会や経済におけるアイルランドに焦点を当てた領域であり、1～3年次を通じてアイルランドとヨーロッパの関係について多面的に理解するためのモジュール（1年次「ヨーロッパにおけるアイルランド：概念と文脈」（6ユニット）、2年次「ヨーロッパにおけるアイルランド：文化」（3ユニット）「ヨーロッパにおけるアイルランド：経済」（2ユニット）など）が用意されている。

主題研究は、学生がある領域について集中的な学習ができる機会を作ることが狙いとされており、ビジネス研究、英語、地理、歴史、アイルランド語、体育学、宗教研究が用意されている。主題研究については1～2年次に3モジュール、3年次に2モジュール履修する必要があるが、1～2年次はそのうちの一つは、コミュニケーションスキルや「職業に関係する学習」と主題研究を統合する科目を履修することになっている。

海外留学については、2年次の第2セメスターに、ERASMUS プログラムに参加する学生がヨーロッパの大学に行くことが可能になっている。

(b) University College London⁹⁾

ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）は1826年に創立された大学であり、ロンドン大学を構成するカレッジの一つとなっている。ただし連合大学の一部であるが、2005年からは独自に学位授与権を持っている。また研究機関としての評価も高く、QS 大学ランキング（2013年）では4位、イギリス国内ではケンブリッジに次ぐ2位に位置づけら

れている。学生数（13-14年）は、2万9千人（パートタイム含む）。学部生が1万6千人、大学院生が1万3千人）で、1万2千人がUK 外出身の学生となっている（<http://www.ucl.ac.uk/srs/statistics/TableA>）。学部は10学部存在し、本稿の主題であるリベラル・アーツについては、現在の所 Arts & Humanities 学部の1学科（Arts & Sciences）が担当している。

2012年9月よりリベラル・アーツ教育をメインとした新しいコース（Bachelor in Arts and Sciences; BASc）が開設された。なぜ開設することになったかについては当時の学長（provost）の Malcom Grant が次のように語っている（Tahir, 2010）。彼によると、従来のイギリスの大学にみられる、専門科目のみを履修するモデルでは学生の「視野を狭めてしまうことに常々不満を持っていた」。「狭隘な世界観を持つ学生を育てることから脱却してグローバル市民である学生を育てたい」、そして、これまでも人文科学や文系科目について昔から議論があったことを指摘した上で、「それらに取り組むのがこのリベラル・アーツ・プログラムであると考えている；つまり学識があり数学的思考に強い（literate and numerate）学生を育てること」。

実際あとで見ると分かるが、UCL のプログラムでは計量的手法に関して全学生必修となっており、開設目的としてあげられている literate and numerate な学生を育てようとしていることがうかがえる。

またコースディレクターの Carl Gomblich によるとこのプログラムの説明は次のようになっている（UCL, 2011）。

UCL の Arts & Sciences 学位はイギリスの他の学位とは似ていません。文系科目と理系科目を組み込むことができるなど、履修プログラムを学生自ら組むことが可能になります。これは全く新しい、広さと深さを与えるコースであり、学生は人文科学、社会科学と自然科学、工学の組み合わせによって、自分の学位を作ることができます。卒業生はグローバル経済の多様なセクターで働くための十分な能力を持つことになるでしょうし、修士課程や他分野でさらなる学習を続ける準備が十分に出来ています。

学位プログラムの構造について見てみよう（表2）。まずこの学位には二つのプログラムが存在する。一つは3年のプログラム、もう一つは外国留学が組み込まれた、4年で履修を終えるプログラムである。後者のプログラムは3年目に外国留学することになっているが、その他は前者のプログラムと同様となっている。また UCL のプログラムでは、学生はパスウェイ（Pathways）とコア（Core）から科目を履修することになっており、毎年それぞれから2コース・ユニット（ほとんどの科目（半期）が0.5コース・ユニット）ずつ履修する必要がある。

表2 UCLのプログラム

	コア				パスウェイ			
	0.5cu	0.5cu	0.5cu	0.5cu	0.5cu	0.5cu	0.5cu	0.5cu
1年次	知識へのアプローチ： 学際的研究	学際的手法	複雑性の探究： 計量的手法	語学	主専攻	主専攻	主専攻	副専攻
2年次	オブジェクト・ベース 学習：ミュージアム・ ストーリー	学際的選択 科目	価値判断をす る：質的思考	語学	主専攻	主専攻	主専攻	副専攻
インターンシップ								
留学（該当者のみ）								
最終学年	知識経済	論文	論文	語学	主専攻	主専攻	主専攻	副専攻

出典：<http://www.ucl.ac.uk/basc/prospective/timetable> 注：cu はコース・ユニットの略。

パスウェイは学生がその中から主専攻や副専攻を選ぶことになる科目群であり、4つのパスウェイ（pathway）、すなわち文化（Cultures）、衛生と環境（Health and Environment）、科学と工学（Sciences and Engineering）、社会（Societies）から構成されている。これら個別のパスウェイにはそれぞれの学年で履修すべき科目が用意されており、その中から自分の主専攻から3つ（1.5コース・ユニット）、副専攻から1つ（0.5コース・ユニットを構成）を選択することになっている。

例えば文化を主専攻に取った学生は、1年次には、「言語学入門」や「古代と近代の政治」、「英文学入門」や「ヨーロッパ美術史」、「知識と現実」といった科目から3つ選択し、あと一つを他のパスウェイ（衛生と環境、科学と工学）から選択することになっている。ただし主専攻に文化あるいは社会を取った学生は、副専攻は衛生と環境あるいは科学と工学を選択しなければならない制約がある（逆も同じ）。これはプログラムの履修が文系と理系それぞれバランス良く行われるためであるが、履修については学科を越えた大学全体からの幅広く自由な履修を認めながらも、パスウェイの目的に沿った履修をさせるためにいくつかの制限を2・3年次にかけている。学生は科目が要求する条件を満たさないと履修できない（科目によっては履修条件が課せられている）、プログラム・ディレクターによって履修科目が承認される必要がある、などである。これらの点は後述するようにイギリスのリベラル・アーツがアメリカのそれとは異なる点であるとされている。

UCLのリベラル・アーツ・プログラムのもう一方の柱であるコアについてみてみよう。コアの目的は異なる学問領域間をつなぐことであり、文系科目と理系科目間の学際的学習を可能にするツールを学生に身につけさせることである。そうした科目を学ぶことによって、広い分野を学習することができるだけでなく、自分自身の学際的な深さを確立することを可能にするとしている。コアの科目は次の二つに分けることができる。一つが、学際的な関連づけを行うためにすべての学習領域で使われる特定のテクニックを身につけさせる授業—「外国語」や「複雑性の探究—計量的手法」などであり、もう一つが、学際的・

分野横断的手法で学習領域にアプローチし、大学で通常見られる学問領域を横断する授業—「知識へのアプローチ」「質的思考」や「オブジェクト・ベース学習」(object-based learning) などとなっている。またコアにはインターンシップも組み込まれている。2年次のおわりにフルタイムで最低6週間のインターンシップが要求されている。

コアもパスウェイと同じく1年で2コース・ユニットを取る必要があるが、パスウェイと異なりすべてが必修科目である。1年次は「外国語」「複雑性の探究—計量的手法」「学際的手法」「知識へのアプローチ：学際的研究」、2年次は「外国語」「オブジェクト・ベース学習：ミュージアム・ストーリー」「学際的選択科目（6科目から一つ選択）」「価値判断をする：質的思考」、最終学年では「外国語」「論文」（1コース・ユニット）「知識経済」となっている。

外国留学が必須の4年プログラムでは3年次に UCL の協定校に留学することになっている。基本的には1、2年次に学習してきた外国語をさらに伸ばすことができる国に留学し、その国の言葉でパスウェイで選択した主専攻を勉強することを目的としている。ただし UCL が認めた場合は、留学先でも英語で教えるコースを履修することが出来る。現在アメリカ、カナダ、エクアドル、コロンビア、ペルー、オーストラリア、ニュージーランド、中国、日本、シンガポール、韓国、フランス、ドイツ、スペイン、オランダに留学することが出来る。ちなみに日本の提携校は早稲田大学と一橋大学である。

(c) King's College London¹⁰⁾

キングス・カレッジ・ロンドン（以下 KCL）は1829年に創設された大学である。UCL と同じくロンドン大学を構成するカレッジの一つであるが、元々は無神論者の大学と言われた UCL に対抗して作られた国教会の流れをくむ大学であった。1836年には両者が基礎となってロンドン大学が創設されたが、2008年以降は、UCL と同じく、カレッジが独自に学位を授与している。

2013年 QS ランキングでは19位、イギリス国内では6位に位置づけられている。学生数（2012-13）は2万5千人（パートタイム学生含む。学部生が1万5千人、大学院生が1万人）であり、UK 以外の学生は8千6百人となっている（KCL, 2013）。学部は12学部存在し、リベラル・アーツ学科は Arts & Humanities 学部属している。

リベラル・アーツ学科は2012年から開設されており、学位名は BA in Liberal Arts である。この学位プログラムを開設するときの説明によると、この学位は、多くの科目で優秀な成績を収め、大学入学後もそれらの科目を履修し続けたいという学生の要求への対応しており、主・副専攻を決める前に学生に新しい科目を勉強する機会を与えることも可能としている。学部長（当時）の Jan Palmowski によると、この学位によってあらゆる職業の将来のリーダーを教育し、彼らがグローバル市民となるのに役立つだろうとしている（KCL, 2011）。

KCL が提供するリベラル・アーツの特徴は次の6点にあるとしており、簡単にまとめて

みると以下のようになっている。

1. 柔軟性と学際性：人文科学や社会科学の科目から自分なりの学位を作れる。数学や自然科学の必修は無し
2. 価値：UK でも増えつつある4年でなく、3年で学位取得できる
3. エンプロイアビリティ：インターンシップや多様な語学プログラム、多彩な教育によってキャリアの準備が可能
4. 国際観：多文化都市で世界中からの人々と勉強ができ、外国留学も可能
5. 専門的知識：世界をリードする教員による示唆に富む講義を経験でき、ゼミやチュートリアルにも参加する
6. 学生サポート：パーソナル・チューターがつき、学位取得に向けてアドバイスをうけられる

それでは学位プログラムの構造についてみてみよう（表3）。3年間を通じて、1年に120単位取得することが求められており、1科目が15単位あるいは30単位となっている。1年次は必修が1科目（15単位）、語学（15単位）、選択が90単位となっている。必修教科は「基礎：ロンドンの生活」というロンドンの歴史を学ぶ科目が設定されており、リベラル・アーツを学ぶ場所としてふさわしい場所としてのロンドンを学ぶ科目となっている。選択科目はグループA～Dに分けられており、グループAおよびBからはそれぞれ1教科は履修する必要がある、グループCからは1教科のみ履修が可能、グループDについては、関連する語学の授業を履修した場合のみ履修できるとなっている。それぞれのグループの科目を見ても、人文・社会科学系科目が中心となっている。

2年次は必修が1科目（15単位）、主専攻が60単位、主専攻以外が45単位履修することになっている。必修については「権力と社会」という科目が設定されており、シラバスを見る限り理論社会学やパフォーマンス研究の色が濃い授業のようである。主専攻については、joint-honours degree の学生と同等のレベルにまで学生が学習できるように、一つの領域に焦点を合わせることになっている。2年次ではパーソナル・チューターや学科のプログラムはありつつも、主専攻科目の履修においては、リベラル・アーツ学科とは別の学科にホームを持つことになるところに一つの特徴がある。またセカンド・タームではKCL が提携している外国の大学で履修することも認められている。主専攻以外では、主専攻の学びを深める科目や他の分野の科目を履修するが、語学やインターンシップを履修することも出来る。

3年次も必修が15単位、1科目、主専攻60単位、主専攻以外が45単位となっている。必修は「コネクションズ：リベラル・アーツを探究し、コミュニケーションする」という科目で、それぞれ別の領域を研究しているが共通の問題に関心がある学生らが、コミュニケーションをとり、共同で作業することを可能にし、自己の専門領域を超えて解釈することを可能

にすることを狙いとしている。主専攻は論文執筆が主となっている。

表3 KCL のプログラム

	必修モジュール	語学モジュール	選択モジュール	主専攻	主専攻以外
1年次	基礎：ロンドンの生活 (15)	語学 (15)	グループ ABCD からルールに従って選択 (90)		
2年次	権力と社会 (15)			主専攻 (60)	主専攻以外 (45)
3年次	コネクションズ：リベラル・アーツを探究し、コミュニケーションする (15)			主専攻 (60)	主専攻以外 (45)

出典：KCL サイトより筆者作成 注：カッコ内の数字は単位数を表す。

主専攻は必修だが、副専攻についてはオプションとなっている。副専攻はある分野について75単位以上（2年次第2セメスターを留学した場合は60単位）履修することが求められている。副専攻は主専攻として提供されている専攻から選ぶことが出来る¹¹⁾。

海外留学については2年次第2セメスターで提携校への留学が推奨されている。ドイツ、シンガポール、香港、ブラジル、アメリカ、などに8校あげられているが、これら以外にもカレッジ全体の海外留学なども利用できる。また2年次にはインターンシップも用意されており、希望者は受講できる。

(2) 考察およびまとめ

以上3大学のカリキュラム構造を見てきたが、それぞれ特色のあるカリキュラムであった。共通する点としては、全員が履修する必修科目を3年間用意していること（セント・メアリーズでは1～3年次の人間開発研究、1～2年次の国際研究、UCL ではコア科目群、KCL では各学年に一科目15単位の授業）、インターンシップに代表されるエンプロイアビリティを高める授業があること、多文化社会やグローバル化を意識した科目構成（第2外国語、留学など）、リベラル・アーツなので当然だが、学際的で選択科目が多いプログラム構成になっていること、などがあげられる。そのほか自由な履修を認めながらも、ある程度系統的に学習ができるように履修科目が設定されている点、あるいは履修制限を課している点も共通している。

他方異なる点だが、セント・メアリーズは他の2大学と異なり小規模な大学であり、そのためか、履修する授業の選択の幅が比較的狭い。また必修科目の内容にも各大学の違いが現れている。セント・メアリーズでは人間開発研究および国際研究の領域は、あるテーマを学際的に学習するという授業になっているが、UCL のコアは語学や計量的手法の学習や学際的手法の学習といった、方法論的な授業から成り立っている。一方 KCL は必修

が他の2大学よりも少なく、各学年に1科目となっている。また UCL では自然科学分野を必ず履修する仕組みになっているが、他の2大学ではそのようになっていない点なども指摘できよう。

現在リベラル・アーツを導入している大学が確認できるだけで11校であったが、そのすべてを調査したわけではないので、こうした共通点や相違点がどの程度イギリス的リベラル・アーツの特徴であるかは分からない。ただ KCL でリベラル・アーツ・プログラムのコンビナーをしている Aaron Rosen によると、イギリスのリベラル・アーツ・プログラムはアメリカからインスピレーションを受けているが、単にそれらを採用しているだけでなく、改良している、と述べている (Rosen, 2013a)。彼はアメリカ出身でアメリカのカレッジで学士課程を過ごし、その後ケンブリッジで博士号を取得しているが、学生として UC バークレー、講師としてコロンビア、イエールの各大学で過ごしたため、アメリカのリベラル・アーツの問題点を直に感じたという。それはアメリカのカレッジでは何がりベラル・アーツを構成するかについて似通った、ほとんど区別がつかない概念を共有している点であり、その意欲と戦略が時として硬化したり均質化したりする点であった。一方イギリスでは、各大学が教育的ビジョンを正当化、明確化するようになっており、それぞれの大学がりベラル・アーツの概念を哲学的、構造的に異なる解釈をしているのは良い点だとしている (Rosen, 2013a)。

その他の利点として Rosen があげているのが、イギリスのリベラル・アーツ・プログラムは強固なコアをカリキュラムの中心にしている点である。彼によるとアメリカのリベラル・アーツ・カレッジはそのカリキュラムの学際性を誇ってはいるものの、学生を彼らの関心外のことをさせようとするには苦勞している、多くのカレッジでは学生にとって重要な選択科目を取らせることを放棄していたり、取らせることを必修としても簡単な科目の履修で満たされるようになっていたりするという (Rosen, 2013a)。また UCL の Michael Worton も UCL のカリキュラムは学際性を明白に打ち出しており、それを中心にカリキュラムが構造化されている点でアメリカのカリキュラムとは異なっているとしている (Worton, 2013)。

それでは1章で見たヨーロッパ高等教育におけるリベラル・アーツの復興とイギリス高等教育のそれとはどういう関係にあるのかについて見てみよう。van der Wende 自身が書いているように、ヨーロッパを一括りに出来るかというのももちろんそうではない。もちろんヨーロッパを取り囲む環境の変化はどの国にも等しくやってくるが、それに対してどのような対応をするかは、歴史や文化、経済的な発展段階などによって異なってくるからだ。イギリスの文脈で言えば、先の二つの理由、すなわち1. 学士課程での早すぎる専門分化および専門化の不都合な点を克服するために、幅広くフレキシブルなプログラムを発展させる必要性、2. 卓越性に焦点を当てた、より選抜的な高等教育機関(部門)を設立する必要性、のうち、1つめについては当てはまると言えるだろう。ここで取り上げた3大学ではセント・メアリーズはデアリング報告の影響を受けていることを認めているよう

に、また他の2大学も幅広い知識を持ったグローバル市民を育成することを目的としているように、伝統的な狭いカリキュラムを超える意図を明確に持っている。またウインチェスター大学の Nigel Tubbs も大学教育では全てが断片化されてしまっていることを指摘し、より大きな像を取り戻すことが社会にとっても重要であり、リベラル・アーツ・プログラムの卒業生は、よく書くことができ、意見をはっきりと表明することができ、大きな像を理解しているため、雇用者が求める存在であるが、ただそれだけでなく、より広い社会にとっても非常に重要であるとしている (Attwood, 2010)。

2点目についてだが、イギリスと大陸ヨーロッパ諸国とは違いがあるため、そのまま当てはまることは無いだろう。ヨーロッパでは大学間の格差がそれほどなかったと先述したが、イギリスの場合、建前は別として以前よりオックスブリッジに代表されるエリート大学は存在しているし、いわゆる大学ランキングの上位に格付けされているイギリスの大学は多い。また1992年以降にポリテクニクから昇格した大学とそれ以前からある大学とでは社会的威信も異なっている。そういった意味で平等主義を打破するという意味でリベラル・アーツが検討されたわけではないと思われる。現在11大学がリベラル・アーツ・プログラムを導入しているが、この中にはバーミンガム大学やブリストル大学のように19世紀末～20世紀初頭に大学になった歴史のある大学も含まれるが、ウインチェスター大学のように21世紀になってから大学に昇格した大学も開設している (ウインチェスター大学はイングランドでは最初 (2010年) にリベラル・アーツ・プログラムを開設している)。また、今回紹介したセント・メアリーズは他の2大学に比べると入学要件は高くなく、大学としてもリベラル・アーツの導入がこれまで大学にあまり来られなかったコミュニティに対するアピールとして成功している、と述べているように (Attwood, 2010)、いわゆるエリート向けの教育を標榜しているわけではない。

最後に、リベラル・アーツの再導入に伴う問題点について考えて見たい。まず幅広いカリキュラムだと一般的になりすぎたり、焦点が合っていないものになってしまう危険性がある、あるいは、ある歴史的な文脈を深く理解するためには学際的なアプローチでは学生には困難である、という批判がある (Attwood, 2010)。前者についてはリベラル・アーツへの一般的な批判とも言えるが、イギリスのリベラル・アーツ・プログラムについてはこれまで見てきたようにそのあたりを克服する工夫はしている。また後者について KCL の James Bjork (リベラル・アーツ・プログラム・ディレクター) は、3年間歴史だけを学ぶよりも他の科目も学んだ方が、何がその科目にとって固有なのか、そうでないのかの感覚がえられるので、よりよい歴史家になるのではないかと答えている (Guttenplan, 2013)。これらに対する答えは容易にできるものではなく、また開始されて間もないこともあって何とも言いがたいところである。ただここまで見てきたように、リベラル・アーツ・プログラムはマスターやそれ以上に進学する学生だけでなく、それ以上に現在の変化する環境の中で仕事に就くことになる学生をターゲットにしていると考えると、学際的で包括的なアプローチそのものは時代や社会に求められているものではないだろうか。

アメリカからボローニャ・プロセスに対して批判的な眼を向けている Paul Gaston は、ボローニャ・プロセス15周年に関する論文で、Association of American Colleges and Universities の Essential Learning Outcomes を念頭に置けば、ボローニャ・プロセスの実行は、その核における中身のなさ、注目せずにいられないような高等教育のビジョンの欠如によって、部分的に立ち止まってしまった、としている (2013, p.37)。また Carol Schneider も、ボローニャ・プロセスは、民主的でグローバルなシチズンシップの責務に結びつけられている、統合的で学際的なリベラル・エデュケーションをヨーロッパの学生に約束していないと指摘した上で、知識社会が要求することを理解すると、アメリカ流のリベラル・エデュケーションが経済的に欠かせないものであるとしている (2008, p.3)。

彼らの批評が的を射たものであるかどうかはここでは置いておくが、Gaston はヨーロッパ高等教育指導者もアメリカのリベラル・エデュケーションの例を受け入れることを考慮しているかもしれない、そしてすでにその方向に進みつつあると述べている (p.37)。イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国でリベラル・アーツ・プログラムが増加しているのは、それがアメリカ流であるかどうかは別にして、これまで見てきたとおりである。こうした動きが今後どれだけ広がっていくのか、それとも一時的な流行で終わるのか、あるいはさらなる展開が待ち受けているのか、今後もその動向を注視していく必要がある。

参考・引用文献

- American Academy of Arts & Sciences (2013) *The Heart of the Matter: The Humanities and Social Sciences for a Vibrant, Competitive, and Secure Nation*. Cambridge: American Academy of Arts & Sciences.
- Attwood, R. (2010) "It's the Breadth That Matters." *Times Higher Education*, 23/12/2010. (2014年2月5日アクセス)
- (Dearing Committee) National Committee of Inquiry into Higher Education (1997) *Higher Education in the Learning Society*. <http://www.leeds.ac.uk/educol/ncihe/> (2014年4月3日アクセス)
- European Commission (2005) *Communication from the Commission -Mobilising the brainpower of Europe: Enabling Universities to Make their Full Contribution to the Lisbon Strategy*. <http://eur-lex.europa.eu/legal-content/EN/TXT/?uri=CELEX:52005DC0152> (2014年7月19日アクセス)
- European Ministers of Education (1999) *The Bologna Declaration*, 19/6/1999.
- European Ministers Responsible for Higher Education (2009) *The Bologna Process 2020 - The European Higher Education Area in the New Decade*. Communiqué of the Conference of European Ministers Responsible for Higher Education, Leuven and Louvain-la-Neuve, 28-29 April 2009.
- European Ministers Responsible for Higher Education (2010) *Budapest-Vienna Declaration on the European Higher Education Area*. 12/3/2010.
- European University Association (2010) *Europe's New Higher Education Landscape*.

- Brussels: EUA.
- Gaston, P. (2013) "A Troubled Adolescence: What the Fifteenth Birthday of the Bologna Process Means for Liberal Education." *Liberal Education*, Fall 2013, Vol. 99 Issue 4, pp.30-37.
- Guttenplan, D. (2013) "In Britain, a Return to the Idea of the Liberal Arts." *New York Times*, 12/5/2013. http://www.nytimes.com/2013/05/13/world/europe/in-britain-a-return-to-the-idea-of-the-liberal-arts.html?pagewanted=all&_r=0 (2014年2月5日アクセス)
- Higher Education Statistics Agency (2014) *All Students by HE Institution, Level of Study, Mode of Study and Domicile 2012/13 (Table 1)*. <https://www.hesa.ac.uk/dox/dataTables/studentsAndQualifiers/download/Institution1213.xlsx>. (2014年9月5日アクセス)
- KCL (2011) "News-New Liberal Arts Degree." (posted on 15/09/2011)
<http://www.kcl.ac.uk/newsevents/news/newsrecords/2011/09September/New-Liberal-arts-degree-launched.aspx> (2014年7月19日アクセス)
- KCL (2013) *1st December Enrolled Student Headcount 2012/13: Information Development and Analysis*. <http://www.kcl.ac.uk/aboutkings/facts/ida/stats/HeadcountSummary2012.pdf>. (2014年7月19日アクセス)
- Nussbaum, M. (2010) "Critical Faculties." *New Statesman*, 31/5/2010.
- Rosen, A. (2013a) "Model Amendment." *Times Higher Education*, 18/7/2013. (2014年7月19日アクセス)
- Rosen, A. (2013b) "College: It's not just 'Made in the U. S. A.'" *Los Angeles Times*, 20/8/2013. <http://articles.latimes.com/2013/aug/20/opinion/la-oe-rosen-americans-foreign-colleges-20130820> (2014年7月19日アクセス)
- Schneider, C. (2008) "Bologna Plus: The Liberal Education Advantage." *Liberal Education*, Fall 2008, Vol. 94 Issue 4, pp.2-3.
- Tahir, T. (2010) "Liberal Arts Offer Something Completely Different." *The Guardian*, 19/1/2010. <http://www.theguardian.com/education/2010/jan/19/liberal-arts-degrees> (2014年2月5日アクセス)
- Thrift, N. (2013) "The Return of the Liberal Arts to Europe." *The Chronicle of Higher Education*, 1/11/2013. <http://chronicle.com/blogs/worldwise/the-return-of-the-liberal-arts-to-europe/33259> (2014年3月11日アクセス)
- UCL (2011) "UCL News-UCL Launches Innovative New Arts and Sciences Undergraduate Degree." <http://www.ucl.ac.uk/news/news-articles/1109/11090203> (2014年7月19日アクセス)
- van der Wende, M. C. (2011a) "The Emergence of Liberal Arts and Sciences Education in Europe: A Comparative Perspective." *Higher Education Policy*, Vol. 24, pp. 233-253.
- van der Wende, M. C. (2011b) "Trends towards Global Excellence in Undergraduate Education: Taking the Liberal Arts Experience into the 21st Century." Paper for the 4th International Conference on World-Class Universities. <http://www.auc.nl/binaries/content/assets/projectsites/amsterdam-university-college/map-1/trends-towards-global-excellence-in-undergraduate-education-taking-the-liberal-arts-experience-into-the-21-st>

- century.pdf (2014年2月5日アクセス)
- van der Wende, M. C. (2012) "Liberal Arts Institutions in Europe." CHEA International Seminar 25 January 2012. <http://www.chea.org/pdf/Liberal%20Arts%20Institutions%20in%20Europe.pdf> (2014年3月11日アクセス)
- Winckler, G. (2006) "The Contribution of Universities to Europe's Competitiveness." Speech Given to the Conference of the European Ministers of Education; 16-17 March 2006; Vienna. http://www.eua.be/eua/jsp/en/upload/EUA_Winckler_Speech_160306.1142503291615.pdf. (2014年7月13日アクセス)
- Worton, M. (2013) "Big Picture from All Angles." *Times Higher Education*, 21/2/2013. <http://www.timeshighereducation.co.uk/comment/opinion/big-picture-from-all-angles/2001745.article> (2014年7月19日アクセス)
- 木戸裕 (2005) 「ヨーロッパの高等教育改革—ボローニャ・プロセスを中心にして—」『レファレンス』658号 (2005年11月)、pp.71-98。
- 木戸裕 (2008) 「ヨーロッパ高等教育の課題—ボローニャ・プロセスの進展状況を中心として—」『レファレンス』691号 (2008年8月)、pp.5-27。
- ゴンザレス／ワーヘナール編 (2012) (深堀／竹中訳) 『欧州教育制度のチューニング：ボローニャ・プロセスへの大学の貢献』明石書店。
- 杉谷祐美子 (2002) 「アメリカの教養教育—私高研・研究セミナーから (アルカディア学報 No.97)」『教育学術新聞』2082号 (2002年11月13日)。
- 館昭 (2010) 「ボローニャ・プロセスの意義に関する考察—ヨーロッパ高等教育圏形成プロセスの提起するもの—」『名古屋高等教育研究』第10号、pp.161-180。
- 田中正弘・森利枝 (2014) 「ボローニャ・プロセスへの対応による新たな学位・単位制度の活用と課題—ドイツ・スイスにおける取組から—」『21世紀教育フォーラム』第9号 (2014年3月)、pp.9-18。
- 松浦良充 (2004) 「『リベラル・アーツ』をめぐる理解と誤解—比較大学・高等教育史の視点から—」『教育文化』第13号 (同志社大学文学部教育学研究室)、pp.16-40。
- S. ロスブラット (1999) (吉田／杉谷訳) 『教養教育の系譜』玉川大学出版部。

Web サイト

- Association of American Colleges and Universities サイト <http://www.aacu.org/index.cfm>
- Bologna Process サイト <http://www.ond.vlaanderen.be/hogeronderwijs/bologna/>
- European Higher Education Area (EHEA) サイト <http://www.ehea.info/>
- KCL Liberal Arts サイト <http://www.kcl.ac.uk/artshums/depts/liberal/index.aspx>
- QS TopUniversities サイト <http://www.topuniversities.com/>
- StMary's University College Liberal Arts at StMary's サイト <http://www.stmarys-belfast.ac.uk/academic/liberalarts/default.asp>
- UCL Arts and Sciences (BASc) programmes サイト <http://www.ucl.ac.uk/basc>

註

- 1) 通常イングランド、ウェールズ、北アイルランドの大学は3年で学士課程を終えるが、スコットランドは4年（3年で普通学位、4年で優等学位）となっている。スコットランドでは3年次以降専門科目を最終的に決める前段階として、1～2年次に基礎的な科目を学習する。またスコットランドでは後期中等教育においても他の地域と異なり幅広い学習が行われていることもあり、本稿ではスコットランドは対象外としている。
- 2) リベラル・エデュケーションはアメリカにおいてリベラル・アーツにもとづく教育のことを指す。リベラル・アーツとは職業に直結しない学問分野のことをさす。また一般にアメリカのリベラル・アーツ・カレッジで行われる教育がリベラル・エデュケーションとよばれ、「特定の職業や実務に直結するのではなく、無知や偏狭から自らを自由にできるような知的認識や批判的思考を身につけることで、広い視野と柔軟な発想と創造的な行動力をもって社会で生きてゆくことの基盤を育成する」ことをめざしている（松浦、2004年、p.32）。つまり幅広く学習すること、専攻もしくは専門課程を深く履修していくこと、この2つがリベラル・エデュケーションの構成要素としている。ヨーロッパの高等教育におけるリベラル・アーツ教育もアメリカの影響を受けているため、基本的に方向性は同じと考えていいだろう。
- 3) 正確にはボローニャ宣言前の1998年の法律（「大学大綱法」（第4次改正））で学士・修士の課程を各大学の裁量で設置することができるようになっていた。
- 4) チューニング・プロジェクトは、大学主導のプロジェクトであり、高等教育機関および専門分野のレベルにおいて、ボローニャ・プロセスを実践する普遍的なアプローチを提供することをめざすものである（ゴンザレス／ワーヘナール編、2012年、p.191）。詳しくは同書参照。
- 5) 詳しくはロスブラット（1999）第3章などを参照。
- 6) van der Wende（2001a, b）は、オランダにおけるリベラル・アーツ・カレッジの導入と発展について、とくに Amsterdam University College の例を取り上げ論じている。
- 7) UNISTAS（<https://unistats.direct.gov.uk/>）はイギリス（UK）の大学に関するデータや情報を検索し、比較することができる公式サイトである。イングランド、ウェールズ、スコットランドの各高等教育財政審議会および北アイルランドの雇用学習省（Department for Employment and Learning）によって運営されている。
- 8) プログラムについての記述は、特記している以外はすべてセント・メアリーズのサイト、Liberal Arts at St Mary's から引用した。
- 9) プログラムについての記述は、特記している以外はすべて UCL のサイト、Arts and Sciences (BASc) programmes から引用した。
- 10) プログラムについての記述は、特記している以外はすべて KCL のサイト、Liberal Arts から引用した。
- 11) 主専攻には現在の所、古典研究、比較文学、開発地理学、英語、環境地理学、映画研究、フランス語、ドイツ語、ヘレニズム研究、歴史、人文地理学、音楽学、哲学、政治学、ポルトガル語、スペイン語、神学・宗教学となっている。

The Resurgence of Liberal Arts in Europe: the Case of the United Kingdom

Toshiyuki SUZUKI

This article explores the resurgence of liberal arts in Europe and three universities' cases in the United Kingdom. The reasons why liberal arts education has been introduced into European countries are to deal with the ongoing massification of higher education and the progress of Bologna Process, by which traditional specialised undergraduate education need to be changed. In the UK, there are 11 universities introducing liberal arts programme. Main features of the UK universities' curricula of liberal arts are that each university justifies and clarifies their educational visions, and interprets the concept of liberal arts from the different points of view, which leads to idiosyncratic curricula of these universities. According to an academic who is a course director of liberal arts programme of a university in the UK, these are not the same as the counterpart of the United States where liberal arts education is the main programme of undergraduate. These features of the UK universities' liberal arts programme may be fit for students living in a rapid changing globalised society where people need generic skills and broadening perspectives because their curricula are interdisciplinary and comprehensive.

Keywords : United Kingdom, Higher Education, Liberal Arts, Europe
